

# 宇木汲田遺跡出土銅鐸舌

分野 歴史

地域 唐津

◎地図・写真・統計資料など



宇木汲田遺跡出土銅鐸舌

(『唐津市の文化財』より)

## ■宇木汲田遺跡出土銅鐸舌（うきくんでんいせきしゅつとどうたくぜつ）

この銅鐸舌は昭和58年に唐津市教育委員会が宇木汲田遺跡の発掘調査の際に宇木汲田のムラの中央広場と考えられる土壌内から発見したものである。時期は同時に出土した土器からみて、弥生時代中期初頭から中頃と考えられる。完形品だが、鋳上がりそのまま多数の甲張りを残していて、仕上げ調整はなされていない。形状は、断面が楕円形の棒状をなすもので、また中央部両側面には無数の敲打痕がみられ、実際に使用されたことを示している。本例はその大きさからみて、いわゆる小銅鐸に伴うものではなく、朝鮮式大型鐸もしくは国産の通常の銅鐸用として製造されたものと考えられる。もし国産の銅鐸用と考えた場合、弥生中期を下らないとされる時代を考慮して、その銅鐸の形式も古段階以前のものが推定される。全長10.5cm・重さ62.2g。

この中央広場ではおそらく各種の祭祀を行っていたと考えられる。前で説明した銅鐸舌や把頭飾の出土がそれを裏付ける。

中央広場の東側斜面標高8～9mに甕棺墓地が宇木川に面して、東西75mにわたり長くつくられ甕棺墓129基、土壌墓3基からなっている。甕棺墓は土壌墓を中心にして取り囲むように分布し、東と西の2つの群に分けられる。青銅器は西側のみに集中し、東側にはない。東側は1例を除いて管玉のみの副葬である。戦死者と考えられるのは、両群にまたがっている。甕棺の中でも水平埋置に近いものに青銅器が副葬され、直立埋置のものに管玉が多く副葬されている。

この中央広場を南側から取り囲むように竪穴住居が立ち並んでいたものと考えられる。ムラの北の端には貝塚と一部墓地が形成されていた。この貝塚は昭和5年に発見され、松浦史談会や日仏合同調査、九州大学などの4回にわたる調査が行われ、弥生前期と縄文晩期凸帯文時代の貝塚を調査した。弥生前期の貝塚はほぼ南北に幅5m、長さ約10m以上にわたって検出された。弥生前期より前代の凸帯文時代の貝塚も前期の貝塚と平面的には一部重なりつつほぼ平行して幅6～7m、長さ13mの範囲で存在することが確認された。

これから先は推測だがムラの北側の谷とムラの南側の谷筋には水田が開かれていたと考えられる。東側は宇木川の氾濫原とラグーンによって区切られていたと考えられる。この繁栄をほこった宇木汲田のムラも中期末以降しだいに末盧国の中心集落の地位を柏崎遺跡や田島遺跡、桜馬場遺跡に譲ることになる。

平成2年3月30日 県重要文化財（考古資料）指定  
唐津市西城内（唐津市教育委員会）

◎引用・参考文献（出典）

◆『唐津市の文化財』

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ  
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：  
[http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts\\_lib/index.html](http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html)